

今から予防の意識付け！

【熱中症による救急統計について】

例年、気温や湿度が徐々に上昇する6月頃から、熱中症による救急搬送事例が多くなります。天候が安定しない6月は、日によってまた時間帯によって気温の変動が大きいことから、身体が暑さに慣れにくく、急に暑くなったタイミングでの運動や屋外での作業中もしくはその後に熱中症を発症する事例があります。このような6月の熱中症リスクの特性の理解とともに、これから夏を迎えるにあたっての熱中症に対する注意のポイントを示すために、過去5年間（2016年から2020年まで）の熱中症による救急統計（6月1日から9月30日まで）を取りまとめましたのでお知らせします。

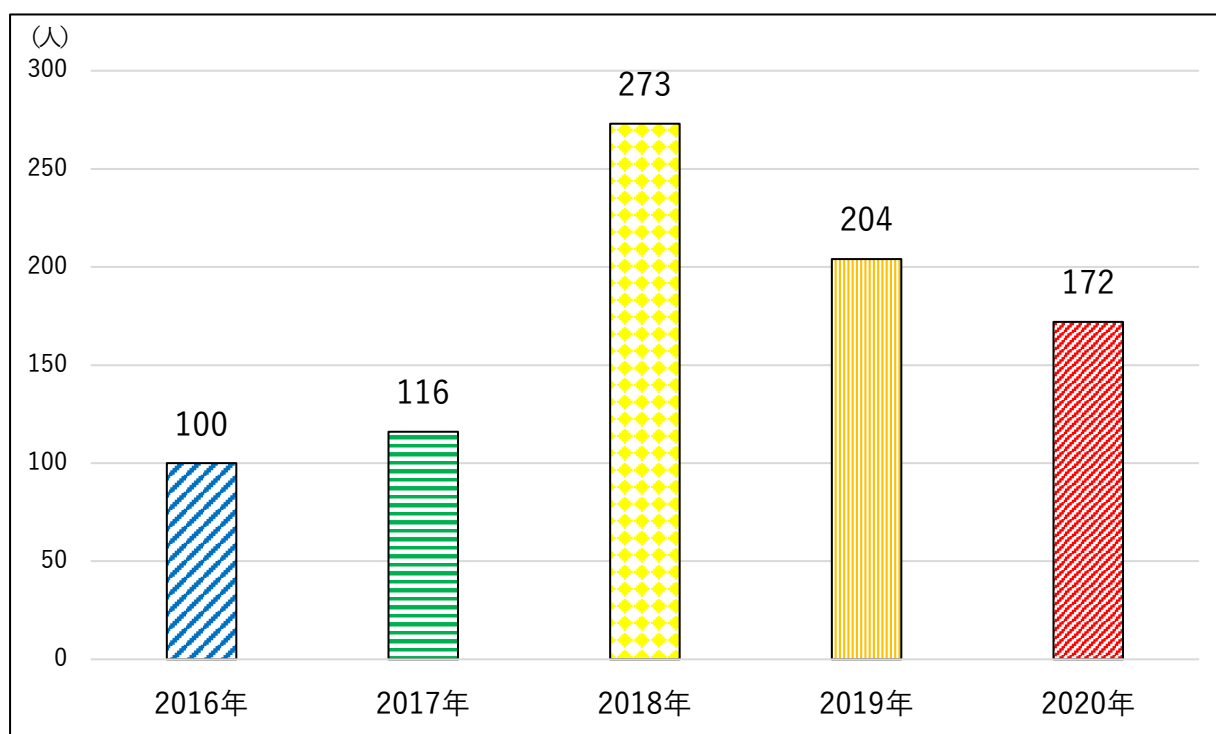
また、今年も昨年に引き続き、新型コロナウイルス感染症の感染予防のためのマスクを着用する機会が多く、身体に熱がこもりやすい状況が多いこと、さらには外出自粛により自宅で過ごす時間が多く暑さに慣れる機会が少ないことなどから、熱中症リスクが高まる可能性があります。

※ 小数点を含む数値は、小数点第二位を四捨五入しています。

1 年別の救急搬送人員

本組合管内では、過去5年間（2016年から2020年まで）に熱中症（熱中症疑いを含む）により865人が救急搬送されています。（それぞれ6月1日から9月30日まで）

最も救急搬送人員が多かったのは2018年で273人、次いで2019年の204人と続きます。

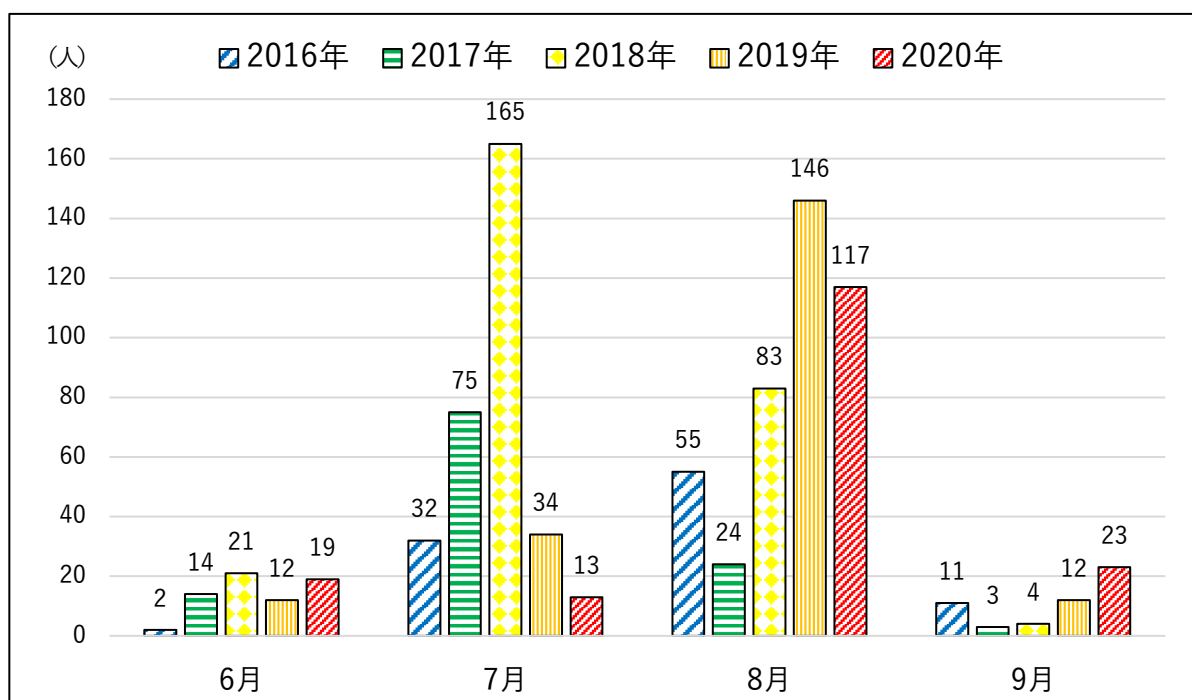
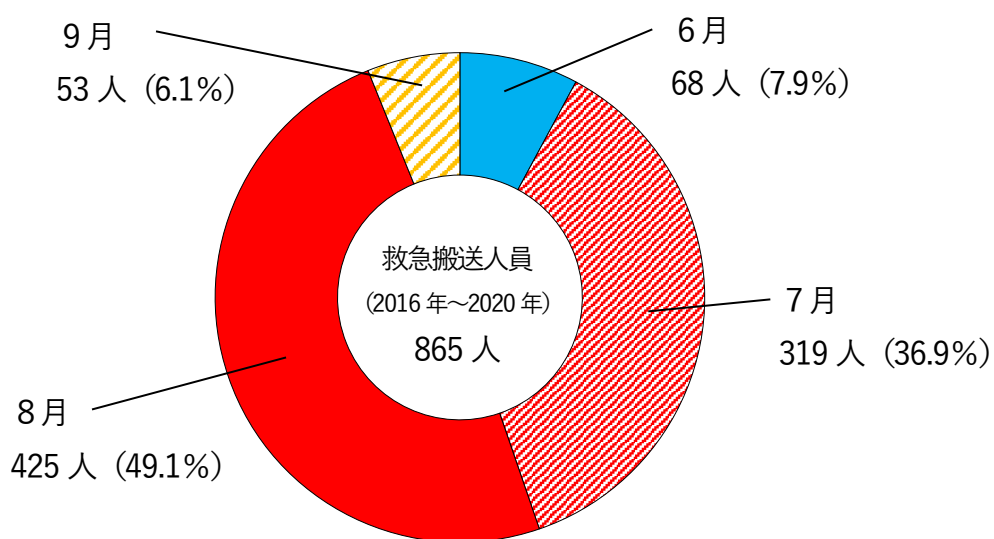


2 月別の搬送人員

過去5年間の合計を月別にみると、8月が425人（49.1%）で最も多く、次いで7月が319人（36.9%）となります。

各年の月別をみると、年によって7月が最も多い場合と、8月が最も多い場合があり、これは梅雨明けの時期などが関連していると推測されます。

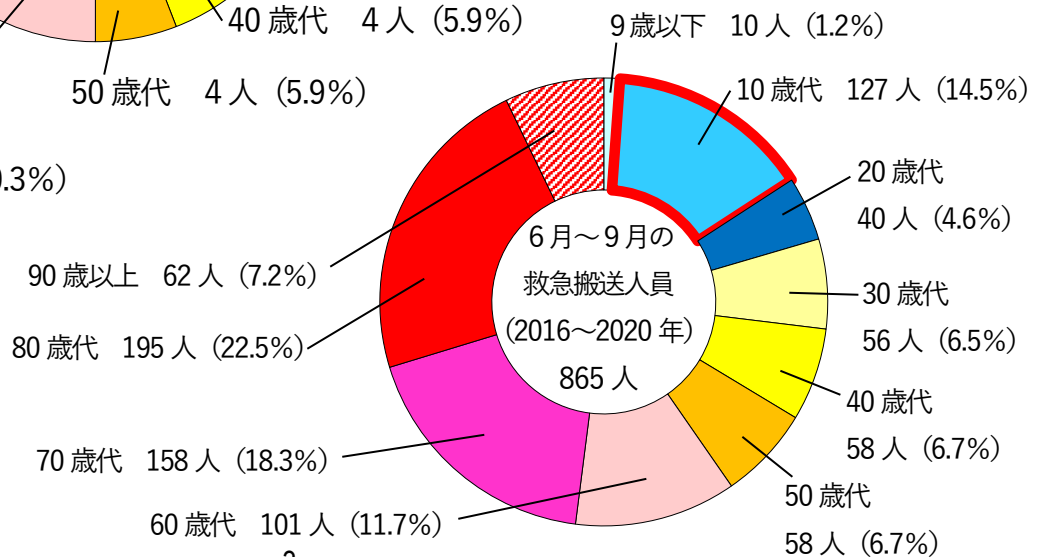
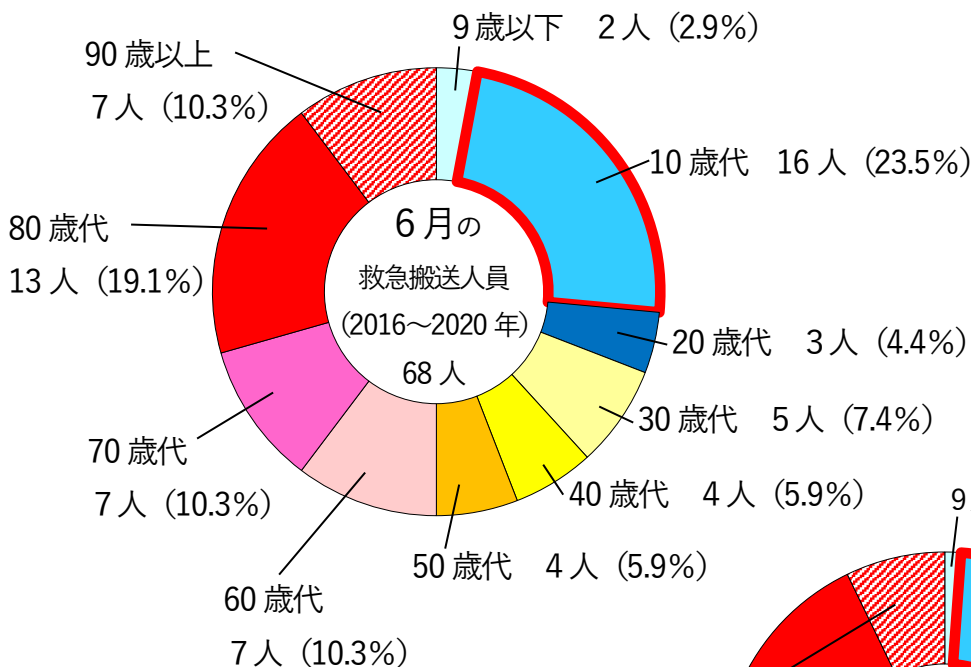
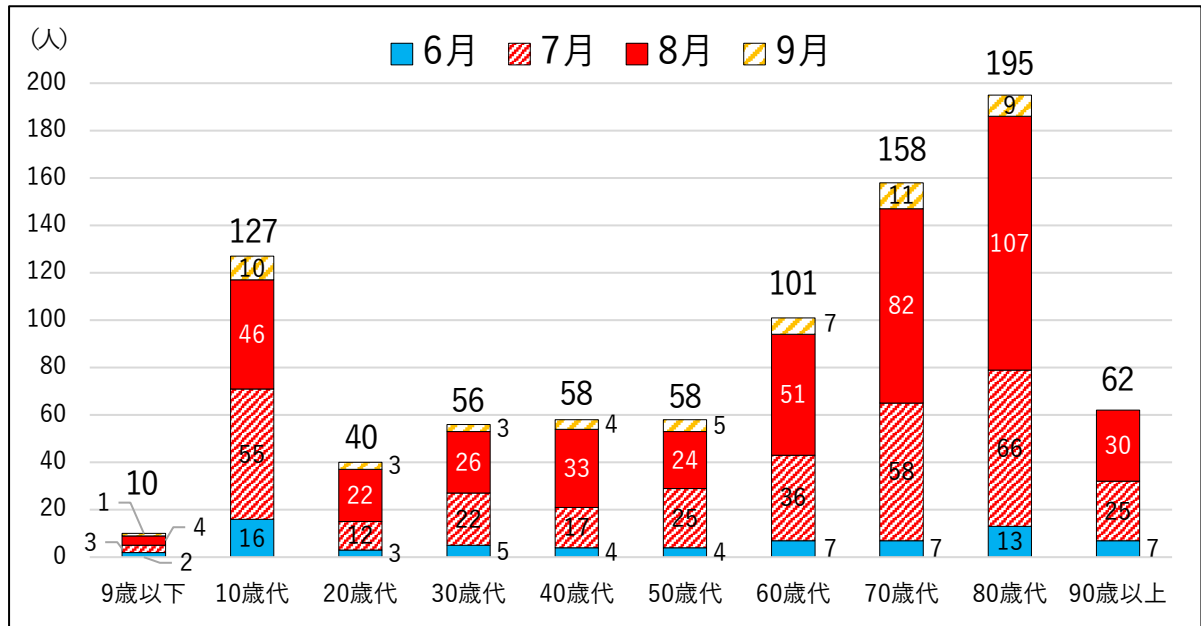
2018年は7月14日ごろに梅雨明けしたため、7月に熱中症による救急搬送が多発し、2019年は7月25日ごろ、2020年は8月2日ごろに梅雨明けしたため、8月に熱中症による救急搬送が多発しました。（梅雨明けの月日は、いずれも気象庁発表。）



3 年代別の搬送人員

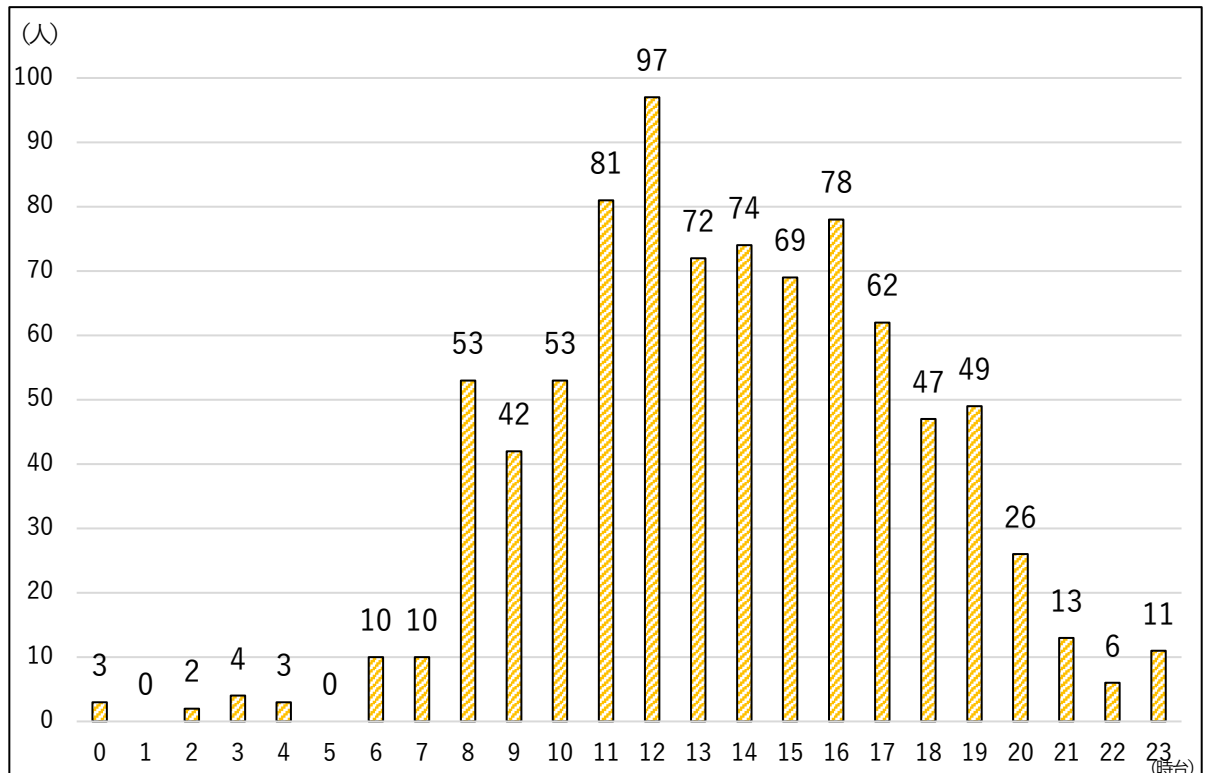
過去5年間の合計を年代別にみると、80歳代が195人（22.5%）で最も多く、次いで70歳代が158人（18.3%）、10歳代が127人（14.7%）と続きます。

6月から9月までの期間で見ると、60歳代以上が516人で全体の59.7%を占めています。一方で、6月のみに着目すると、10歳代が16人（23.5%）で最も多いことがわかります。



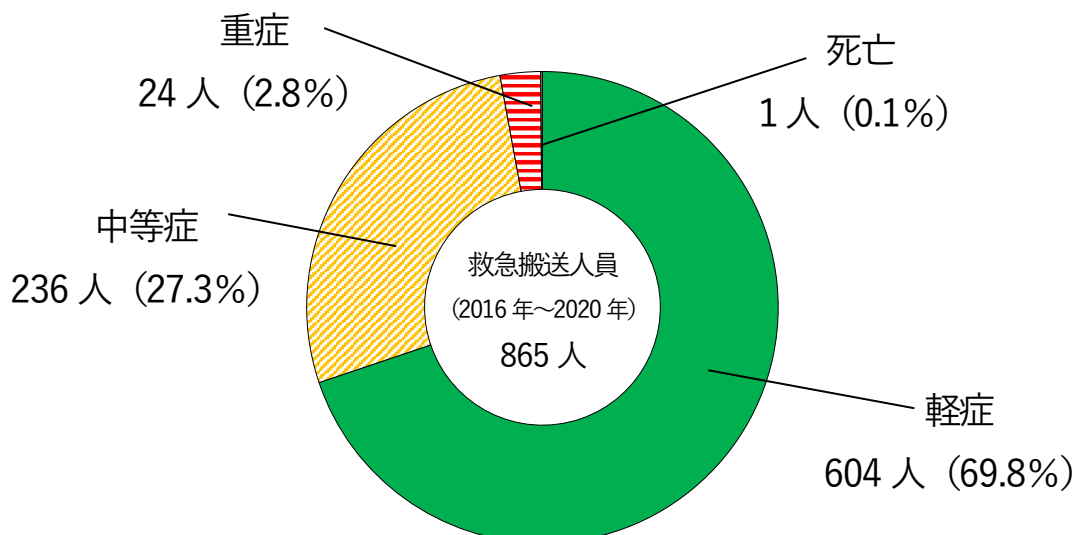
4 時間帯別の搬送人員

過去5年間の合計を時間帯別にみると、12時台が97人（11.2%）で最も多く、次いで11時台が81人（9.4%）、16時台が78人（9.0%）と続きます。



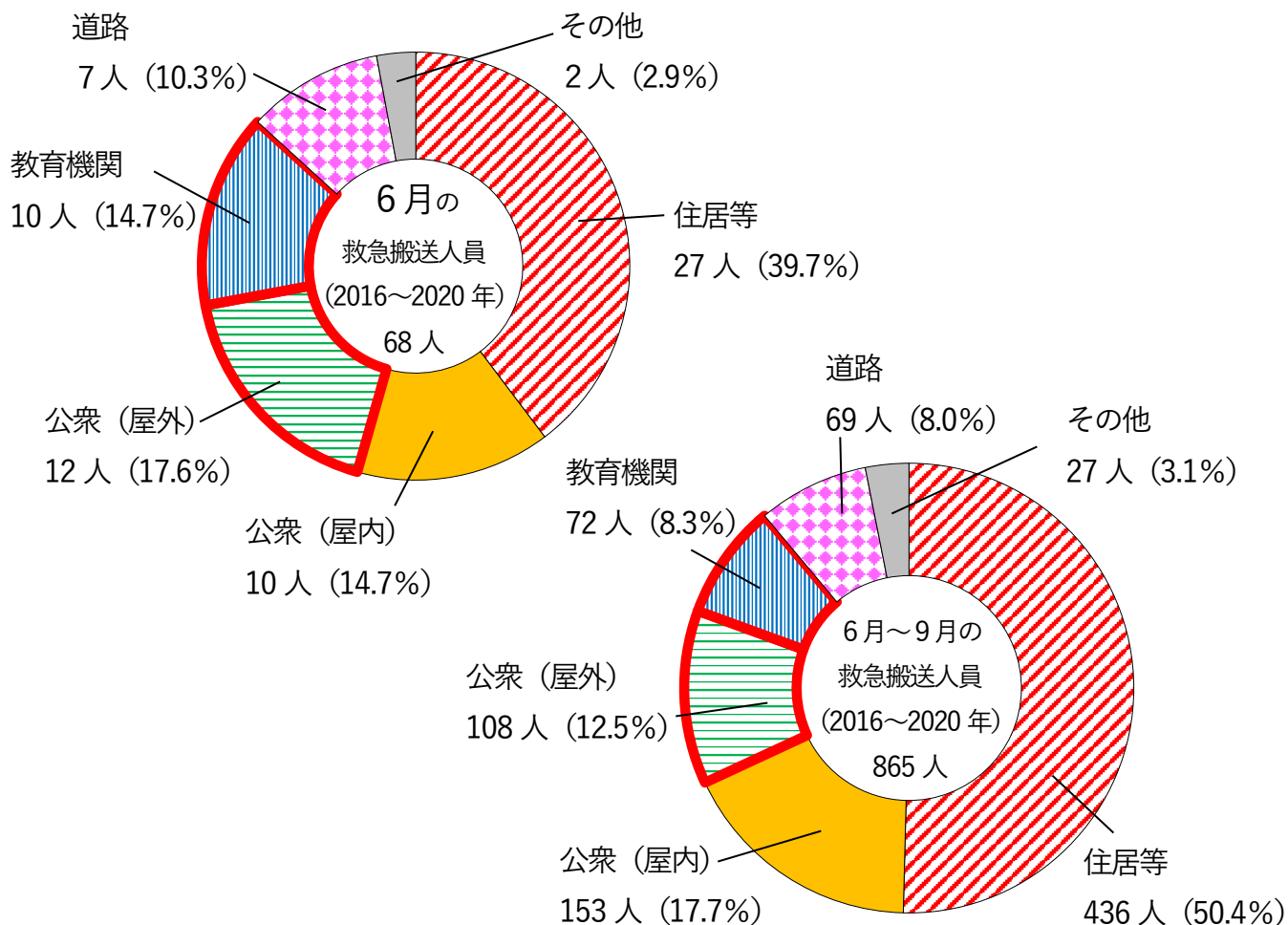
5 初診時の傷病程度

過去5年間の合計を初診時の傷病程度をみると、30.1%（261人）が入院の必要のある中等症以上（死亡の1人を含む）と診断されています。そのうち24人が重症以上と診断され、1人が死亡しています。



6 救急要請時の発生場所

過去5年間の合計を発生場所別でみると、「住宅等」での発生が436人（50.4%）で最も多く、次いで「公衆（屋内）」が153人（17.7%）、「公衆（屋外）」が108人（12.5%）、「教育機関」が72人（8.3%）と続きます。



7 6月の熱中症事例

◆ 事例1

10歳代の女性。体育の授業中（長距離走）に急にふらつきを呈し倒れこんだもの。（軽症）

◆ 事例2

10歳代の男性。体育館でバレーボールをしていたところ急に頭痛とめまいを呈したもの。（軽症）

◆ 事例3

50歳代の男性。ゴルフのプレー中に急に手足のしびれを呈したもの。（軽症）

◆ 事例4

60歳代の男性。自宅庭の草むしりをしていたところ気分不快を呈したもの。（中等症）